

〔論文〕

DVDによるたたく表現活動モデル提示をどう観るか

——保育者と学生を比較して——

横 井 志 保

名古屋学院大学スポーツ健康学部

要 旨

幼児のたたく表現活動の実験的实践において、5歳児のたたく表現活動では、子どもに表現するイメージが持てることが表現を引き出すことにつながるがわかっている。一緒にたたく仲間や実践者（時に保育者）がモデルとなり、その表現を支える。これまでにDVDによる実践のモデル提示を保育者や保育を学ぶ学生がどう捉え、理解するのかを明らかにしてきた。本研究では、保育者と学生の捉え方や見方の違いを明らかにすることを目的とした。学生は活動の内容の違いに関わらず子どもの表現そのものを評価し、保育者は活動全体を理解しようとしてから子どもの表現を評価することが明らかとなった。

キーワード：たたく表現活動，5歳児，DVD視聴による評価，調査

How Childcare Persons and Students Evaluate DVD of Modeling of Beating Expressive Activity:

——Compare the Childcare Persons and Students——

Shiho YOKOI

Faculty of Sports and Health
Nagoya Gakuin University

発行日 2016年1月31日

はじめに

これまで筆者は、幼児のたたく表現活動の実験的实践を行ってきており、5歳児のたたく表現活動では、子どもに表現するイメージが持てることが表現を引き出すことにつながることを経験してきた。また、そこにはある一定の課題性があることや、そこで共に行う仲間や表現を支える実践者（時に保育者）の存在が大切であることを報告してきた¹⁾²⁾。幼児の表現活動においては、その多様な「モデル」の提示が表現を支える上で重要であると考えている。

先行研究において、幼児の知的発達について保育のビデオ視聴により保育者の実践的な思考の中に現れる学びやそのイメージのプロトコル分析の有効性と知見が報告されている³⁾。また、香曾我部による幼児の音楽表現活動の様子を記録した動画クリップを用い、音楽家への半構造化インタビューによって幼児の音楽表現の「創造性」への認識や活動の中での意味づけを明らかにしたものもある⁴⁾。また、筆者は保育者や保育を学ぶ学生たちが、活動のモデル提示をどのように受け取り、理解するか。たたく表現活動のモデル提示をどう捉えるかを明らかにしてきた⁵⁾⁶⁾。保育者と学生のたたく表現活動の見方やその捉え方は明らかに違いがあるようであった。

本研究では、保育者と学生の活動に対する捉え方や見方の違いを明らかにすることを目的とし、また今後の保育者養成における指導の一助としたい。

方法

筆者が実験的に実践した2つのたたく表現活動を録画し、特徴的な場面をそれぞれ一部分切り取りDVDにし、保育者と学生に観てもらい質問紙による評価を求めた。詳しい手続きは以下の通りである。

筆者が2010・2011年11月に5歳児を対象に行った、たたく表現活動の実践をビデオカメラで撮影したものから、活動場面Aは6分50秒間、活動場面Bは3分11秒間を抽出してDVDにした。

保育者を対象とした調査は2011年12月に行った。DVDを見てもらい調査用紙の質問に回答を求めた。DVDと調査用紙は園毎に郵送依頼し、10部ほどは個別に依頼回収した。研究協力いただいた保育者内訳は公立幼稚園教諭26名、保育士16名、私立幼稚園教諭63名、保育士3名の計111名であった。

学生を対象とした調査は2014年6月に実施。5名～10名程度のグループ毎にDVDを視聴してもらい、その場で評価し、調査用紙に回答してもらい回収した。対象学生はR短期大学保育科1年生8名、2年生16名、保育専攻2年生（4年制大学における4年生相当）5名N女子大学児童教育学科幼児保育学専攻3年生13名、4年生9名の計51名であった。

表1 保育者の内訳

	幼稚園	保育園	計
公立	26	16	42
私立	66	3	69
計	92	19	111

表2 学生の内訳

	1年	2年	3年	4年	計
R短大	8	16	0	5	29
N女子大	0	0	13	9	22
計	8	16	13	14	51

質問項目は、1. 子どもの表現の様子が楽しそうで満足しているか 2. 音楽的な表現に感じられるか 3. 実践者の指導・援助の仕方が適切であるか 4. 子どもの参加の様子にバラつきがあるか 5. 実践者主導で、表現することを子どもたちに押し付けているか 6. 子どもには活動が難しいと思うかどうか の6項目で、他に気付いたことや感じたことについての自由記述を求めた。活動場面AB共に同じことを尋ねた。

これらそれぞれの調査結果を比較、検討する。

《活動ABの特徴と場面抽出について》

活動AB共に対象は5歳児10数名。活動Aの使用楽器はカホン、ショートトROMス、ミニジャンベ等、子どもが床に直接座ってバチを使用せずたたくことのできる大きさの太鼓類。活動Bでは、Aで使用した楽器の中でミニジャンベを大型のジャンベに変更し、ロングトROMスを加えた。他に木製の箱、鍋等もスタンドにつるしてAの楽器に加えて使用した。

活動Aの内容は、簡単なリズムパタンの模倣の連続で、call and responseの持続である。実践者が提示するリズムパターンはおよそ4拍であるが、時にまとまりの捉えにくい4拍以上の長いリズムパターンも含まれた。リズムパターンはアクセント、フレーズの長さ、たたき方や動きで変化が付けられていた。子どもたちは密集して一か所に集まって実践者とは向かい合って床に座り、1つの楽器を2、3人の子どもが囲んでたたいていたところもあった。保育者が後方の子どもと共に1つの太鼓を囲んで活動に参加していた。DVDでは後方から撮影したものを使用したため、子どもの表情ははっきりとしていない。

活動Bの内容は、演奏の参加は子ども自身が決め、一人ずつ楽器や音具を思い思いの方法で鳴らし、即興的な表現（たたいたリズム）を仲間繋いでいくという課題性があった。演奏の時間の長さ、始まり、終わり、全て子どもに任されていて、子どもによって長短あった。子ども同士が繋ごうと次の奏者に合図するなどし、相互の関係に応答性がみとめられた。実践者は子どもの状態に応じてプレイヤーの一人として参加した。DVDでは4人の男女児が演奏しているが、演奏していない子どもは離れて椅子に座り、見て待っていた。

活動ABの違いは、上述の様に‘集団的’か‘個’の表現か、また活動のリズム性や身体性に違いがある。

DVDの場面については、たたく表現活動として特徴的な場面で、場面そのものの独立性は高いが、性格が異なるものを抽出した。また、一般的な保育では実施されていないと推測されるものである。更に、DVDからのみの情報で活動を捉えて評価してもらうために、活動のねらいや経過等の説明はしておらず、最小限にした。活動場面AB共に編集はせず、活動の一部分を切り取った形で提示した。

結果と考察

質問紙調査の結果を表3にまとめた。また、表中に示した色付きのデータにおいて保育者、学生間において有意差が認められ、学生の活動AB間における有意差は認められなかった。保育者については、後で述べることとする。

表3 保育者と学生による評価結果のまとめ

(%)

質問・回答項目		A		B	
		保育者	学生	保育者	学生
1. 子どもの表現や様子が楽しそうで満足している	思う	48.6	83.5	82.9	89.1
	思わない	13.5	3.6	1.8	5.5
	どちらでもない	37.8	10.9	15.3	5.5
2. 音楽的な表現に感じられる	思う	59.5	87.3	76.6	89.1
	思わない	15.3	5.5	2.7	1.8
	どちらでもない	25.2	7.3	19.8	7.3
3. 実践者の指導・援助の仕方が適切である	思う	29.7	72.7	54.1	70.9
	思わない	5.4	1.8	4.5	5.5
	どちらでもない	63.1	23.6	40.5	21.8
4. 子どもの参加の様子にバラつきがある	思う	34.2	34.5	36.9	40.0
	思わない	45.0	49.1	28.8	34.5
	どちらでもない	20.7	16.4	32.4	23.6
5. 実践者主導で表現することを子どもたちに押し付けている	思う	15.3	3.6	4.5	0.0
	思わない	53.2	72.7	76.6	87.3
	どちらでもない	31.5	21.8	18.9	12.7
6. 子どもには活動が難しいと思う	思う	5.4	3.6	8.1	7.3
	思わない	70.3	72.7	70.3	83.6
	どちらでもない	24.3	21.8	21.6	9.1

* 表中の網掛けは保育者、学生間において $P < 0.05$ 有意差あり

(1) 活動の特徴の違いによる捉え方の違い

活動場面AとBでは、'集団的'な活動か'個'の活動かという違いがある。評価の結果を見ると、学生は活動の特徴に関係無く同じ様に評価していることがわかるが、保育者は活動の特徴によって、その捉え方に違いがある。集団的な活動Aでは実践者のリズムパタンの提示の模倣の繰り返しによる活動であることから、1. 子どもの表現や様子が楽しそうで満足しているかの問いに、「思う」が48.6%と、学生の83.5%と比べるとかなり少ない。また、学生に比べると「どちらでもない」と回答している保育者は多く、このような集団的な活動に対する「やらせ」的な感覚がぬぐえず、それを嫌う結果と言えよう。それは、5. 実践者主導で表現することを子どもたちに押し付けているかの問いに、学生の「思わない」72.7%に対し保育者は53.2%と少なくなっていることからわかる。また、2. 音楽的な表現に感じられるかの問いに、活動Bにおいても「思う」と回答する保育者の数は学生よりも少ないが、活動Aではリズムパタンの模倣の繰り返しと言っても、そのcall and responseは、とてもリズムカルにやりとりされ、言葉での説明をしないで子どもが実践者の動きやしぐさ、活動の流れから自分の次の行動を決め、参加していた。それは音で繋がりが音楽的であったと言える。学生の87.3%が「思う」と回答したのに対し保育者は59.5%に留まっている。

(2) 指導・援助の捉え方の違い

活動ABどちらの場面においても、3. 実践者の指導・援助が適切であるかの問いに対して学生より保育者が「思う」と回答している数が少ない。特に活動Aでは29.7%と少ないが、保育者の意味する「指導・援助」とは、集団的な活動の場合、クラス全員の子どもが理解できるように言葉で丁寧に説明したり、一人一人の間に入っていき、子どもが満足して活動に参加しているかどうかを把握しながら行うことが指導・援助であり、本活動場面の様に、言葉はほとんど話さず、説明もしない実践者のやり方は保育者としては認められないのであろう。それに対し、学生は子ども一人一人の様子から判断して「指導・援助」について評価している。保育者と学生では「指導・援助」の捉え方が違っており、その見方が違うと言えよう。

(3) 自由記述について

活動場面ABそれぞれに「気付いたことや感じたこと」の自由記述を求めた。保育者96%、学生93%の回答率を得た。記述の内容は多岐に亘ったが、以下の5つに分類することができた。1. 子どもの表現や様子について 2. 活動そのものについて 3. 実践者の指導や援助について 4. ねらいについて 5. その他（表現していない席にいる子どもの様子等）

自由記述の分類の結果は以下の表4の通りである。記述の内容は複数の項目に亘り記述しているものから、1つの項目のみについて記述しているものまでであった。活動場面Bについて、4項目に亘り記述している保育者もあった⁷⁾。

自由記述の分類	A		B	
	保育者	学 生	保育者	学 生
1. 子どもの表現の仕方	62.2	57.1	63.1	48.8
2. 活動そのもの	45.9	25.4	32.4	16.3
3. 指導・援助について	18.0	1.6	28.8	22.5
4. ねらい	15.3	0.0	6.3	1.3
5. その他	14.4	15.9	32.4	11.3

自由記述の分類の結果から、保育者、学生共に1. 子どもの表現の仕方についての記述が最も多いことがわかるが、活動内容の違いによる差は見られなかった。

本調査ではDVDからどのように表現活動を評価するのかを見るために、活動の経過やねらい等、詳しいことは何も伝えなかった。しかし、保育者は表現そのものを評価するだけでなく、評価するには活動のねらいについて知らなければ評価しにくいといったような、ねらいに言及する記述がいくつか見られた。しかし、活動場面Aにおいては学生の記述にねらいに関するものは見られなかった。活動場面Bも1.3%であることから、学生はねらいに関して、ほとんど関心を向けないことがわかる。

次に記述の内容であるが、保育者は自分の気付きや考えを記述するものと、DVDの中で起こっていることをそのまま記述しているものがあった。(自由記述の引用の文末の(A)(B)は活動ABの別)

- 先生が真似をして叩こうねという言葉がけがなくてもリズムや音の大小強弱を真似して叩いていた。子どもたちの中に合わせて叩くと心地良く感じるという意識があるのだと思った。(A)
- 実践者の叩き方を聞いて同じように叩く場面は少し長いものはリズムがとりにくいようだけれども、短いものはリズムを捉えて叩ける様子に子どもの感性のすばらしさを感じた。(A)
- 経験を重ねてくると自分で楽しんで表現できることを実感した。また、指導者が少し援助することですばらしい音楽として聴こえてくる。(B)
- 同じ年長児でも身体いっぱい使って音を出し、表現することを楽しむことができる子や、叩くと音が出る、叩き方を変えると少し違うことを考えながら取り組んでいるのかなと見える子など、様子は様々であったが、実践者と叩くことでやりとりができることに驚いた。(B)
- 同調(周囲と)するような表現の内容であったように感じた。(A)
- 子ども達はリズムをきざむことは耳からよく聞いてよくその通りに模倣しているなと思いました。リズムをきざむことは得意だけれど、音の強弱については、そんなに感じる事ができないのだなと思いました。(A)
- 自分の好きなリズムを思うように叩いていた。体全体で(とびはねながら)リズムを叩いて楽しい活動となっていたと思う。(B)
- ドラマーのように夢中で演奏をしていた男の子が印象的だった。(B)

学生でもやはり、気付きや自分の考えと、観たままを記述するものがあった。保育者には見られなかったが、自分の子ども時代の活動を思い出しながら記述しているものも見られた。

- 途中止まって困ってしまう子どもに対して一緒に鳴らしたりリズムをとって行く援助をしていて、子どももすぐに楽しむ姿があった。保育者が一緒になって楽しむことで、子どもたちもさらに楽しんでいたように感じた。(B)
- 子どもの表情が音楽を通してどんどん笑顔になっているように感じた。(B)
- 保育者がきちんと丁寧に教えればできるんだと思った。(B)
- 実践者が言葉ではなく音で子どもと関わっており、子どももそれを楽しんでいるように見えた。(A)
- 叩ける物の数に対して子どもの人数が多いと感じました。(A)
- 自分が年長の時、太鼓で似たようなことをしたのを思い出しました。(A)

まとめ

本研究では、保育者と学生がたたく表現活動場面のどこに焦点を当て、どのように捉え、それをどう評価するか。また、保育者と学生ではどこに差が見られるのかが明らかになった。

学生は、明らかに異なるそれぞれ特徴を持った活動に対し、同じ様な観点で見ても、評価するのに対し、保育者は活動の内容によって、観点が異なり評価の仕方に違いがみられた。また、学生ではほとんど興味を示されなかった活動の意図やねらいについて、それらが示されないと活動を評価しにくいといった意見が保育者からはあった。目の前で起こっている事だけを評価するのではなく、その活動の意図やねらいを知って、それに即してその活動を評価しようとするのだ。それは普段の保育の捉え方が現れていると言えよう。活動のねらいを達成するために、保育を振り返り評価することは大切であるが、学生が本調査で見せたように、子どもの表現自体をそのまま素直に受け入れ評価するということが同時に必要であろう。どちらか一方の捉え方だけをしては偏った見方しかできないが、バランス良く見ようとすることは保育者にとって大切な視点となろう。

謝辞

実践に協力してくれた幼稚園、保育園のおともだちと先生、調査にご協力くださった保育者と学生の皆さん、いくつもの実践を共にしてくださり、ご指導くださった梅澤由紀子先生に感謝致します。

引用・参考文献

- 1) 梅澤由紀子, 横井志保 2010「リズム表現としての両手で叩く活動の構造と援助について」愛知教育大学幼児教育研究第15号pp. 1-8
- 2) 横井志保 2010「幼児の叩く活動に関する研究：表現を引き出す活動の流れと方法」名古屋柳城短期大学研究紀要第32号pp. 141-146
- 3) 秋田喜代美他 2004「保育者の「知的発達」に対する実践的イメージの検討：ビデオによる多声的方法を用いて」日本保育学会大会発表論文集（57）pp. 260-261
- 4) 香曾我部琢 2009「幼児の音楽表現における「創造性」の概念とその構成要素：楽器を使った音楽活動の動画クリップを用いた半構造化インタビュー」中部大学現代教育学部紀要第1号pp. 45-54
- 5) 梅澤由紀子, 横井志保 2012「叩く表現活動モデルのDVD録画を、どう読み取るか—保育者への質問紙調査から—」愛知教育大学幼児教育研究第16号pp. 1-8
- 6) 横井志保 2014「5歳児のたたく表現活動のDVDによるモデル提示を保育を学ぶ学生はどのように評価するか」名古屋柳城短期大学研究紀要第36号pp. 93-100
- 7) 前掲5)